

よみがえれ！  
有明訴訟弁護団  
(後藤 藤和)発行  
092-512-1636  
090-9602-0700

# 諫早湾の再生 - スンチョン湾



## 開発やめ干潟保全評 価ラムサール登録

よみがえれ！有明訴訟原告団・弁護団は、11月20日〜23日、韓国の順天(スンチョン)湾(順天市・人口27万人)を視察した。順天湾は、大きな潮汐と広大な干潟(25m<sup>2</sup>)が特徴の諫早湾に似た内湾である。ムツゴロウやワラスボ等の特異な生物相も諫早湾と近似している。かつて干拓によって干潟を開発した順天市は、90年代に干拓をやめ干潟を保全することを決めた。

順天市は市域を市街地、環境保全地域、緩衝地帯(バッファゾーン)等にゾーニングし、耕作放棄地を干潟に還元する等の再生事業によって、豊かな干潟と動植物が戻ってきた。その結果、2006年に干潟の世界遺産ともいわれるラムサール条約に登録された。

## 年間300万人が 干潟観光に

大都市釜山から自動車で3時間離れた順天市は、2002年までは年間10万人程度の観光客しか訪れてない寒村であった。しかし、干潟の保全に取り組み出してから都市部から多くの観光客が干潟の見学に訪れ、2010年は300



万人を超える観光客が見込まれていく。視察団が順天湾干潟に到着した時は、日暮れ間際であったが、広

大な駐車場が大型観光バスや家用車で満車であり、順天湾エコセンターには外国人を含む多くの観光客で溢れていた。年間300万人の数字が誇張ではないことが実感できた。

## 雇用・経済効果 年間100億円

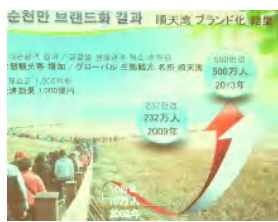
視察団は、スンチョン市役所の崔徳林経済観光局長や順天(スンチョン)大学の金教授(生態学)からレクチャーを受けた。順天湾は、環境の保全が経済の発展につながった事例として世界中から注目されている。順天湾の後背地では、生物多様性を維持しつつ農業生産を上げるために地域で、有機農業(環境保全型農業)が実践され、農家は市と協定を結び全量買い取り保証をしている。また、漁業についても、ムツゴロウやウナギ等が地域



の特産として多くの観光客に提供されており、さらに、順天湾を訪れる年間300万人を受け入れるための飲食店や宿泊施設、エコツ

アー(民泊)なども活性化し、年間1000億ウォン(約100億円)の経済効果をあげている。このように、順天市では、干潟の開発から保全に切り替えた途端に経済的にも活況を取り戻しており、諫早湾の再生に向かおうとしている諫早市が進むべきひとつの道を示している。

## 発想の転換必要



11月27日、日本生態学会、日本魚類学会、日本ベントス学会、軟体動物多様性学会保全委員会主催で「有明海の生物多

様性保全のための四学会合同シンポジウム 有明海の特異な生物相・諫早湾の環境復元の意義」が諫早市民センターで開催された。

特別講演では、韓国の崔特林順天市経済環境局長が「韓国順天市での干潟保全の取り組み」と題し、韓国が順天市を「生態首都」と位置づけ干潟の保全に取り組んでいることを発表した。その上で、崔局長は、「実際に諫早湾を見て、順天湾と非常に地勢が似通っていることがわかった。発想の転換が必要。諫早市も、スンチョン市のように、干潟を中心とした持続的な発展を目指し、世界中の人が訪れるような都市になって欲しい」と語った。